



東日本大震災から15年目のメッセージ集

山田町教育委員会



## はじめに

山田町は陸中海岸のほぼ中央に位置し、東側は山田湾と船越湾に面し、西側は急峻な北上山地に連なる山野と澄んだ川が流れる、自然豊かな土地です。海沿いの地域は多くの魚介類が水揚げされる漁業の拠点として知られ、山間の地域では米作や野菜栽培などの農業が幅広く行われています。

平成23年3月11日午後2時46分、東日本大震災発生。

震度5強の激しい揺れの後、それまで恵みをもたらしてくれていた海は、大津波となって町を襲いました。船越半島は孤島となり、町の中心部では火災が発生しました。波が引いた後に残されたのは、元の町並みが分からなくなる程の瓦礫の山でした。

あの未曾有の災害から15年が経ちます。

町は復興に向けて、防災に力を入れた町づくりを行ってきました。被災した土地の大部分がかさ上げされ、国道沿いに商業地、高台に住宅が並び、海を防潮堤がぐるりと囲んでいます。

一方で、震災の記憶の風化や、震災を経験していない世代への伝承などが課題となっています。

震災の記憶・心情・教訓は一人ひとりが違います。

このメッセージ集には、震災から15年経った今だからこそ伝えたい想いを寄せていただきました。寄稿いただいた方々に感謝を申し上げます。

※本名またはペンネームの下に、震災当時の居住地を記載しています。

## 目次

はじめに	1
東日本大震災の概要	3
体験談「わたしの3」	11
大切なあの人へ「もう一度会えたら、伝えたいこと」	13
支援への感謝「絆、ありがとう」	19
おわりに	22

三陸の津波史

地震の規模

東日本大震災の概要

古代	869	貞観地震による津波
	1257	久慈・野田に津波の記録有
中世	1454	京徳地震による津波
	1611	東北の慶長津波
近世	1616	釜石・大槌に津波の記録有
	1677	大槌・宮古に津波の記録有
	1687	ペルー沖地震による津波
	1751	大槌に津波の記録有
	1762	八戸沖地震による津波
	1763	八戸沖地震による津波
	1793	寛政地震による津波
	1835	福島沖地震による津波
	1856	安政八戸沖地震による津波
	1861	陸前で被害の記録有
近代	1896	明治三陸津波
	1933	昭和三陸津波
	1952	十勝沖地震による津波
	1952	カムチャッカ半島沖地震による津波
	1960	チリ地震津波
	1968	十勝沖地震による津波
	2011	東日本大震災

発生…平成23(2011)年3月11日 午後2時46分  
震源地…三陸沖  
震源の深さ…24キロメートル  
地震の規模…マグニチュード9.0  
山田町の最大震度…5強

山田町の被害状況

死者…686人(外国人1人を含む)  
行方不明者…148人(うち死亡届の受理件数は147人)  
全半壊家屋…3,167戸  
被災家屋の割合…46.7%(一部損壊を含む)  
津波浸水面積…486.9ヘクタール

※令和6年4月26日発表



体験談

「私の3.11」

## わたしの3. 11

当時、長崎地区で一人暮らしの私はそれ程大きな揺れとは感じられず、表に出て近所の人と話をしても、緊急時のような様子もなく、そのまま家に入りました。特に怖さは感じませんでした。

後で考えると、この地区は昔田んぼで地盤が弱く、どんという大きな揺れを感じなかったのかもしれませんが。

しばらくすると防災無線や人々の騒ぎ声で外が騒がしいので表に出てみました。数十メートル先の大きな道路の方に瓦礫やら水が見えた時は何だか分からず、みんなが「津波、津波」と騒いでいるので初めて津波と分かりました。

夜心細く停電の中、町内に住む娘婿が瓦礫を歩いて来てくれました。宮古にいて山道伝いに車で来たが通れず途中置いてきたのでまだ家には帰っていない。娘と孫は安全なところにいること。娘の嫁ぎ先の母さんは避難しているはずのところで一安心しました。今大きな火災が数か所で発生しているが消防も水が無くて困っていたこと。この家は津波ギリギリのところに入らなかったことを教えてくれました。ようやく状況が分かりました。

一人暮らしの私のように、日中若い人がいない老人宅でも、ひざが痛いとか理由をつけて家にいて何も分からずに亡くなった人たちも多かっただろうと思うと残念で心が痛みます。

私も紙一重の運の差で生かされたのかもしれないと思いました。 合掌

Ⓜのおばあやん・長崎

## 俺も会いたい

先日NHK連続テレビ小説「あんぱん」にて河合優実さん演じる蘭子が「会いたい。豪ちゃんに会いたい。」と号泣するシーンを見て、震災当時の記憶がフラッシュバックして嗚咽してしまいました。自分を可愛がってくれた方の奥様と役場の廊下で会い。「たっちゃん。こんなお金なんか要らないから会いたい。Yさんに会いたい。」と二人で抱き合っただけの記憶がフラッシュバックしたのです。丁度震災の1週間前の夜に前から頼まれていた資料をYさん宅に届けた時にはまさか今生の別れになるうとは。

たっつ・山田町

## あつという間の15年

「お前の家、たぶん無いぞ！」地震から3日後、仕事で自宅に行くことができなかつた私に、同僚が最初にかけてきた言葉でした。妻や子供達とも連絡が取れず、安否に心穏やかでない私にはあまりに残酷だなーと思ったものでした。後に家族と自宅の無事（床上浸水したもの）は確認できて安堵したのですが、同僚のお子様が亡くなっている事を聞いて、自分事のように胸が締め付けられる思いがしました。

当時「想定外でした。」のフレーズがやたら耳に付いた記憶があります。「想定？人智を超える自然災害にあまりに鳥澁がましい、人間は神にでもなつたつもりか！」と苛立ちを覚えたものでした。

本災害を経験することで大半の方もそうでしょうが私自身も意識が変わりました。災害で大変なことは沢山ありましたが、今となつては教訓として又歴史として語り継がれていくだろうと前向きに捉えています。山田町に以前のような活気が戻ることをお祈りします。

ふくまる・長崎

2011. 3. 11

当時、私は実家（長崎）から高台にある住居に、家族で歩いて帰宅しているときでした。強い地震が発生し、激しい揺れのため立っていられず、しゃがみ込んでいました。その時の、電柱の激しい揺れや大量の花粉が舞い上がっていたのを覚えています。その後、高台から火災が起きている状況を見下ろしていると、避難してきた両親から実家が被災した事実を知りました。日が暮れてから、消防署の方からの依頼を受け、現場確認に同行し、その中で実家が炎に包まれているのを間近で見ました。その光景を前に、人間の無力さを強く感じたのを今でも忘れられません。

あれから15年が経ち、思い出すたびに色々な思いが甦ってきて、できれば思い出さなくなかつた事ですが、この機会に私の体験談として寄稿させていただきたいと思えます。

Y・S・飯岡

## 避難所の幸福

3月11日、山田町の大火災にて、山田高校に避難し、父と母、中三の娘と私、避難所生活が始まる。その3日後、気仙沼に単身で働く夫が、中三の娘を訪ねながら山高へ。娘を見つけ、抱きつき号泣する姿をいまだに忘れることはできません。避難所暮らしで助けられたのは、認知症の母への対応でした。支援の方々が声をかけて下さり、下の世話や温かいタオルで体を拭いて下さり、感謝でした。介護うつで薬を飲めずにいた私は、頭がボーとして、家を火災で失い、失望の日々でした。2週間後に、薬も役所の手配で頂く事ができ、助かりました。又、自衛隊の設置して下さった風呂に入れた時は、山高の桜が咲き始める頃でした。娘と満開の桜の花の下を歩きながら、風呂に入れなかった日々を思い返ししながら、避難所生活はたいへんだけど、温かい風呂に入れる幸福な時間を喜び合いました。その後、仮設、新築の自宅にて、各々の人生を歩んでおります。

ふくちゃん・境田町

## 東日本大震災から得たもの

私は、青森県三沢市で勤務しておりました。午後2時40分頃、激しい地震が発生しました。状況がわからない中で、私の先輩が「お前はテレビを見るな」と言われました。先輩の注意を振り切り、テレビを見ると、地元の宮古市が津波にのまれていた映像を見ました。その後、私は地元近傍である山田町へ災害派遣となりました。山田町に到着すると、そこは私が知っている山田町ではありませんでした。私は、当時若かったため、やれることが限られていました。貴重品の回収、重機による瓦礫の撤去、休日には避難所へ行き友人へ差し入れ、今自分ができることを精一杯やりました。この苦境の中、私の原動力は、被災者からの「ありがとう」の言葉です。震災は、本当に辛い経験でした。それでも、人に感謝される「自衛官」という職に就いて、本当に良かったと思っています。これからも、東日本大震災の教訓を忘れず、後世へ伝えて行きたい。

フミ・青森県三沢市

## 思い込みは危険

あの日、あの時、あの場所を今もはっきりと覚えています。赤信号で止まっていた時、地面を突き上げるような突然の激しく長い揺れで車ごと引っくり返るのではないかと強い恐怖に襲われた事。早く揺れが収まる事を何度も口に出して願った事を！

信号も止まり、携帯も全く通じず、ラジオから「沿岸に3mの津波が予想」と何度も繰り返していました。「よし、3mなら防波堤が守ってくれる」と判断し車を運転していたら、目の前に海側の家の屋根から防波堤を越えた黒い塊が見えました。その途端、車が浮いて流され、電柱にぶつかり、右側の窓が割れ黒い水がドツと入り、車の前部分が沈み始めました。咄嗟にシートベルトを外し、カバンを肩に掛け、思い切り空気を吸い込むと同時に車全体が沈み黒い水の中に。

息止めも限界になり、死を覚悟し、家族に対し先立つ事を詫びていると、車が浮いて、息継ぎが出来ました。浮いては又沈みを何度繰り返したのでしょうか。思い切った車が浮いた時に窓から手を出し、流れて来る物を押していると、網の様な物が手に触れたので必死につかみました。気がつくると高台に避難していた人達が、「早く車から出て、こっちへ来て！」と叫んでいました。車の窓から這い出すと、運転席に座っていると思っていました。車がひっくり返っており、車の天井に座っていた様でした。後部座席に置いたコートはなく、ズボンの右側のポケットに入れていた鍵も無くなっていました。車内で何回転したのか、両手は傷だらけで血が出ており、ズボンは膝部分が破れ、身体中痣だらけでした。今迄津波の時は高い所へ逃げる事を知っていた筈なのに！認識の甘さが招いた自分の愚かさを反省しました。

ずぶ濡れの私を夜通し暖めて下さった方々に感謝しております。ありがとうございました。

はこ・大沢

「あの日の事」「あの日の行動」「あの日の感情」

沿岸で生きて来た私達にとって、津波は昔から聞かされてきた事でしたが、まさか、現実にかかる事はないと思ってい  
ました。

今や日本国中、世界中、災害はあちこちで発生しています。  
だからこそ忘れてはいけない。

「あの日の事」「あの日の行動」「あの日の感情」を。

3. 11の夜は車の中で過ごしました。  
ノイズ交じりのカーラジオから流れる町の様子を毛布にくるまりながらひとりで聞いた寒い夜でした。  
その後の感情は詩にしました。

「無」

防衛本能なのだろうか？

残酷な風景は人の心を無にする

涙も流れない 何も考えられない

一切の感情がシャットアウトされた

津波の後の町の風景は残酷すぎて

心が受け付けない

沢山の沢山の大切な物が一瞬で無くなった

「自分だけではないから」

その言葉を何度聞いただろう

遣り切れなさ 切なさをその言葉で押し殺して

神様なんていないんだって思った

無差別な大量破壊

やつと涙が流れたのは一週間位してから

それから何気ない日常の中で突然やってくる哀しみ

感情が無かった一週間分が

これからの人生の時間の中で

時折やってくるのだろう

受け止めよう

私達は生きているのだから

福士 直美・大沢

### 震災語り部ガイドを通じて

私は、2013年1月より山田町で震災語り部ガイドを行っております。新しく立ち上げた商店街の事業として、当時メディアでは知ることの出来ない被災地の生の声を伝え、防災に役立って欲しいという思いから始めました。多いときで年間2,000人以上の方々に震災ガイドを行っております。

私は、山田町にボランティアで来た方を通じて東海大学静岡翔洋高校の先生と知り合いになり、5年前からオンライン授業を行っております。2年前には実際に高校へ出前授業を行うことも出来ました。静岡の方々の防災意識の高さを感じました。今後もこの活動を通じていろんな人に山田町で起こった災害の凄さや、防災の大切さを伝えて行きたいです。特にも山田町の子供達への未来のメッセージとして。

新生やまだ商店街協同組合 代表理事 昆 尚人・織笠

## 震災、私事。

初めて、経験するただただ恐怖の大地震・津波だった。

町内で仕事だった私は、まず役場へ避難。夜になって近くで働いていた友だちがいないのに気づく。ロウソクの明りのなかで不安でいっぱいだった。夜おそくになって避難してきた彼女をみて、涙があふれた。

その夜、火事で窓ガラスは炎で真っ赤。平安荘に移動し、翌日には豊間根小学校にいた。

その頃、父は私の安否確認のため、役場へ徒歩でむかっていたようだ。サンダルばきで逃げた父は途中、消防関係の人も、長靴を貸してもらい、町内にたどりつき役場へ。生まれて初めての“山田町役場”ではなかっただろうか。偶然居合わせた豊小担当の職員の方から娘の無事を知らされた。そのとき、父は85才だった。

眼に入ってくる町の光景も、日常もすっかりかわってしまったのに、私はしばらくの間、この現実を身体全体で受けとめることができなかつたと思う。

十数年たち、父から“虫を殺すな。命あるものだ”といわれ続けたこと、若い頃はイケメンだったことなど、泣き笑いしながら思い出す。

歩いていると、何台もの車が止まってくれた…。

沢山の人に親切にしていた…。

改めて、お礼を いろいろ。

悠・船越

大切なあの人へ

「もう一度会えたら、伝えたいこと」

天国の貴方へ

震災当日、私は諸用が有り県南水沢市におり、山田町に帰って来たのは翌日です。本来ならば3時間でこれる所、12時間以上かかってしまいました。それからはみなし避難所での生活。貴方の行方不明の知らせを聞いたのが2週間後です。

最後に貴方が私に言った言葉「好きな事が出来ていいね。私は出来ない。」忙しい仕事をしながら両親、孫の世話と大変だったと今更ながら頭が下がります。しばらくは貴方の死を受け入れる事が出来なかった私ですが、震災から2年位経った頃、目にいっぱい涙をためた貴方の夢を見ました。最後のお別れに来てくれたのかなと思うと寂しい気持ちがかみあげて来ました。

それから間もなく私は、地域婦人活動に参加する様になりました。

地域の人に助けられ各地区会長さん達に助けられ、そしていつも声を掛けてくれる幼馴染みと貴方がいるから今日の私が居ると思っています。

これからも私の事を見守って下さい。幼い頃ままごと遊びで子供役だった私。いつでも貴方や幼馴染みに手伝ってもらっていた私。もう少し地域のために頑張りたいと思いますので天国から見てダメ出しを下さい。

にわとりさん・山田町

あなたに会えて

何事もなかったかのように時はただひたすらに刻みつづける。15年目の年月、何んで、何んで、真逆か真逆の繰り返し、忘れることのない魔坂の現実、自然の営みのとてつもないパワーを思い知らされる。我が兄弟の長男の嫁さん、長女の旦那さん、三男の兄、そして従兄弟（従姉妹）達のやさしい笑顔が未だに忘れることのない日々。

何んで逃げない？何んで、何んでと呪文のように繰り返す。3. 11忘れることのないメッセージ、心に記すメッセージ、二度と繰り返してはならないこの災難、この悲しみ、この辛さ、ひとりひとりの「あなたのことは忘れない」「私の心に生きている」

あなたがいたから、私は歩く、ひたすら歩く、尊い生命大事にしたい。

会いたいあなたに、ありがとう。

愛さんさん・大沢

もう一度会えたら伝えたいこと

15年前のあの日、私は3月1日から入所した老人介護施設での初の早朝から午後2時までの勤務の日でした。

「明日早い仕事だから、早く休んだんせ」

「はーあい」

前日夜、風呂上がりのかあさまと交わした何気ない会話が、嫁いで24年目の私との最後の会話でしたし、その姿となりました。

かあさまはいつも家族のことを心配し、近所のお茶のみの皆さんの話し相手になり、これから楽しんでもらいたいと思っています。

いつも優しく、何でもできるかあさまは私の頼りになる先生でした。

今でも教わった通りに毎朝、仏壇にお茶とお線香、灯明、オボキサマ、お花を上げ一日の家族の無事を願いながら手を合わせ、氏神様の祭事には家族で準備をしています。

まだまだ行き届きませんが、頑張っています。もっと教えていただきたかったなあ。

震災後に娘の夢に出てきたそうですね。

「なぜ近所の人には逃げてと大きな声をかけて、自分は避難所から遠回りして人を迎えにいったの」と娘。

「しかたなかったんだよ」と困ったような顔をして話してくれたそうですね。

この話を聞いた私たちは、顔を見合わせながら「かあさまらしいな」と思いました。

しばらくして、その死（行方不明）をずっと納得していなかった夫の夢にも出てきたようですね。後日「和解した」と聞きました。

今は普通の生活に近いものかもしれませんが、やはり元の生活ではないことは分かっています。

それでも、いなくなった人の分も頑張って生きていく事こそが、残された者の務めであり、あまり遠くない将来自分の務めが終わってからの報告事項ですね。かあさま。

チャップラー・船越

おばあちゃんへのてがみ たった一人の孫より

あの日、中学校に登校していた私は先生や皆が周りにいたので、大きな揺れや変化する津波の情報、夕焼けのように真っ赤になった空（市街地の火災）を見ながら山田高校に避難する時も、なんとか自分を保つことができました。もし一人だったらと考えると、今でもとても恐ろしく感じます。

その時の私は、普段から家庭で津波のことについて話していたので、親は何かかするだろう。一番話してくれたおばあちゃんのことだから愛犬と裏山の八幡様へ避難しているものと強く信じていたんだよ。

翌日（震災2日目）、宮古から山田に戻っていた父が高校に来ました。「今から家へ行ってみるから皆と待て」と言っ、自動車道を歩いて田の浜へ向かったそうです。

その日、父は迎えに来ませんでした。翌朝（震災3日目）、父が来た時はほとんどの生徒は帰った後でした。一言言おうかなと覗き込んだ父の顔は、それを許さない程に険しいものだったことを覚えています。

自動車道、国道45号も一部自動車で通れると言い、母の勤務先である吉里吉里の介護施設に向かう時は、いつもの父でした。

車中、おばあちゃんと愛犬が流されたこと、津波の後の火災により田の浜の大部分が焼失し、上の地区を残して瓦礫となっていること。その下には多くの住民のご遺体が多くいるだろうと、静かにゆっくりとした口調で話してくれましたが、車窓から見える変わり果てた景色を見ても、あの時は夢のようで受け入れ難いものがあつたのを覚えています。

あれから15年、いつも仏壇で話しているように、学校を卒業、就職し、2年前に県外からUターンして両親と同居して、又にぎやかに暮らしていること見ていてくれたよね。

いつも見るおばあちゃんは、写真で笑っているけれど、時々声を聞きたくなります。

たった一人の孫からのお願いです。そろそろ帰ってきませんか。家族で待っています。

おふくろ様へ

拝啓 おふくろ様

その後いかがお過ごしですか。

あなたは私と兄に子ども頃から津波が来たら、親を頼らず避難しなさい。父さんは漁船を沖に逃がす。母さんは年老いて寝たつきりになって年寄り避難するから、お前は兄弟と一緒に逃げなさい。その為には日頃から夜停電になってもいいように、枕元に着る順番に服をたたんで、履物も玄関に外向きに並べなさい。と教え込みましたね。

今は津波の心配のない盛岡に住んでいますが、その意識だけは持ち続けています。

そんな家族だからこそ、震災の日の私はあなたと同居している兄家族は各自避難して大丈夫だという強い確信がありました。

しかし、被災地には緊急車両優先で行けず、電話も通じない。ネットの掲示板にも多くの知人のコメントがある中、数日たっても欲しい情報は得られず焦っていた時、ようやく兄からの「母行方不明」の伝言が予想外の仙台経由で届きました。その瞬間わずかに残っていた希望の光が消えました。

あれから15年ですね。今年もまたおふくろさんの好きな花を持って3月11日には海に会いに行きます。

敬具

ほうじ茶・盛岡市

## 15箇年後の想い

わが家では、70代の母親は事情があつて避難所まで遠回りをし、体重2kgの愛犬を入れた大きなペットキャリーを持ち、膝も悪く急斜面の避難階段を上がることを諦めて戻り、大津波に呑み込まれ今も行方不明です。

様々な状況の中で多くの残された人たちは別れの挨拶もなく突然居なくなつた家族、友人、知人を思い「なぜ、どうして」と問続けた日々があつたと聞きます。それは15年たった今でもまだ続いているかもしれませぬ。

当時、人々はあまりにも甚大な被害だったため、自分たち以上に辛い思いをした多くの人々を思い、自分のことは積極的に語ろうとしませんでした。

あれから15年もたつと、その間生き残るために必死に家族を守ってきた世代は高齢化し旅立っていきます。逆に大震災津波を知らない世代が増えていくこととなります。

記録を見ると昭和8年の大津波は明治29年の37年後であり、明治の大津波生存者とその子孫は口伝とともに育つたため、皆で避難し人的被害は少なかつたとあります。地域に「津波記念碑」が立つたのも先人の教えを次の世代に残すためだったのですが、更にその思いを伝えていくための家族、地域で繰り返す口伝の重要性は強く感じています。

また、騒然とした当時の避難所は人命優先であつたことは至極当然のことでしたし、「ペットも家族」の話は動物嫌いの方々にとっては受け入れがたいものだったとも思います。しかし飼い主家族にとって、その後に来た喪失感や罪悪感は、心の復興のためには大きな妨げとなつたと多くの方々の話として聞こえてきました。

近年、国も「人とペットの災害対策ガイドライン」を示し、各自治体も対応し始めていると聞きます。近い将来は「ペットの同行避難・同伴避難訓練」を通して、飼い主も自分の責任を認識し、動物嫌いな方々の理解も得られる社会であつてほしいものです。

そしてそれが当時実現していたならば、もつと助けられた命があつたのではと思つてしまいます。

最後に、あの当時助けていただいた自衛隊・海上保安庁・警察・消防・自治体・他関係機関の皆様・ボランティアの皆様・全世界の皆様は15年たった今、改めて深く御礼と感謝申し上げます。私は（私たちは）皆様のことを忘れませぬ。母もそう想っていることと思います。

支援への感謝

「絆、  
ありがとう」

## 支援の感謝は忘れません

とんでもない悪夢を見ているような日々からもう15年になります。今はそれぞれの住まいで新しい生活に慣れ、若造だった私が高齢者の仲間になりお世話をする側からされる側になりました。この15年の間にも世界中で大きな災害が起こり、沢山の人が苦しい思いを強いられていました。自然の猛威に打ち勝つ事はとても難しいですが防災や減災に知恵を出し合い、苦しむ人が少しでも減る様に、少しでも笑顔になれる様にと願わずにはられません。

あの時世界中から手を差し伸べて貰った私たちは『あの時はありがとう』の思いを忘れず今日も明日も家族が笑顔で地域が笑顔でいられる様に自分出来る事を見つけて出し、支え支えられて行こうと思います。

震災の苦しい記憶は消したい。でも忘れてはいけないあの時世界中に応援して貰った事。

ねねとチャチャのばば・田の浜

## 心からのありがとう

東日本大震災から15年。あの日、突然奪われた日常と失われた多くの尊い命、言葉を失うほどの悲しみは、今も私の心に深く刻まれています。その中で、悲しみや不安に寄り添い、手を取り合い、支え合った無数の「絆」が生まれました。知らぬ人同士が助け合い、地域が一つになり、全国、そして世界から温かい支援や励ましの言葉が届けられました。その力が復興への歩みを支え、希望の灯をつないできたのだとおもいます。困難の中でも人を思いやる心、助け合う強さを学びました。忘れないこと、学び続ける事、次の世代へ伝えることが、今を生きる私たちの責任です。命の尊さと備えの大切さを胸に、未来への歩を進めます。支えてくださったすべての方へ、心から「ありがとう」。

はつつあんの孫・飯岡

たくさんの皆様へ、ありがとう

“大きな地震の後には津波がくる”。大沢で生まれ育った私が、小さな頃から耳にしていた言葉です。学校では、昭和の大津波を教訓とした避難訓練と「海よ光れ」で津波の怖さを学び、津波の際は家族で決めた場所に各自で逃げることで済んでいました。

平成23日3月11日、初めて津波に遭遇しました。その日は宮古市におり、家に帰ることができませんでした。翌日戻れた大沢は、瓦礫の山と、様々なモノとヘドロの混じった臭いがしていました。

その中に、1本の道が作られていました。十二神山の基地から自衛隊の車両が下りて来て、救急車を通すための道を作ってくれたそうです。私には希望の道に見えました。人命救助や瓦礫の撤去、炊き出し等々、寄り添っていただき、とても心強かったです。

その後も国内外問わず、多くの方々に助けていただきました。ありがとうございます。特に、津波に流された母を励まし、夜通し温めてくださった方々には、何回感謝しても足りません。

ふゆ・大沢

### 支援へ感謝

震災時、子供は1歳でまだ小さく、避難所（山田南小学校）で生活をしていました。今でも当時の記憶を思い出します。その当時は、いろいろな人に助けていただき、ありがとうございました。たくさんのご支援もありありがとうございました。今では、子供も大きくなり、高校生になりました。震災で学んだことを活かして、困っている人の手助けをしていき、人と人の絆を大切にしていきたいと思えます。

こう・川向町

## おわりに

三陸沿岸は、古くから「津波常襲地帯」といわれています。記録の残る貞観地震による津波のはるか昔、縄文時代にも津波が発生していたことが、奇しくも震災復興のための発掘調査で明らかになりました。

津波はいつかまたやってきます。

その「いつか」を、津波の記憶や教訓が風化し「忘れた頃」にしないことが、震災伝承の重要な役割です。いただいたメッセージに込められた想いが、明日の防災の一助となることを願っております。

震災伝承事業  
東日本大震災から15年目のメッセージ集

山田町教育委員会  
令和8年3月11日発行